
守る強さ

SERARU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
守る強さ

【コード】
N0925L

【作者名】
SERARU

【あらすじ】
あの時死んだはずなのに……。
交通事故で死んだはずが気がつくとき空を海に覆われた世界の
花畑で眠っていた少年。
記憶も消えて混乱していると二人の少年と一人の少女に出会った。
何故死んだはずの自分が何故生きているのか。
それを知るための長い物語が幕を開けた。

った。

どうしてだ？確かに俺はあの時死んだはずなのに？

ふと、辺りを見渡す。どうやら俺は花畑の中、眠っていたようだ。

「おい、お前名前は？」

俺が黙っていると少年の一人が問いかけてきた。

俺の、名前？ 思い・・・出せない 俺はいったい誰、なんだ？

死ぬまでの記憶はある、それなのに自分の名前だけがすっぱりと抜けている。

それどころかその死ぬ前の記憶すら消えていつているような気がする。

考えれば考えるほど、記憶が剥がれ落ちていく。

俺はまた少年の質問に答えることはできなかった。

「あ、そっか。こーいう時は自分から名乗るんだっけ。」

少年はポンと手をたたき、自ら自己紹介をはじめた。

「俺はアスベル・ラント！ んで、こっちが弟のヒューバートだ。」

「よ、よろしく・・・。」

ヒューバートと呼ばれた少年が恥ずかしいのか、ぎこちなくあいさつしてくれた。

「その女の子は？」

今度はこっちから質問してみた。するとアルベルは困った顔で

「こいつ、記憶が無いらしいんだ。行くところも無いみたいだし今からオレの家まで連れて行くことにしたんだ。」

と、説明してくれた。

「んで、お前の名前は？」

「……。」

「もしかして……君も記憶喪失なの？」

静かにしていたヒューバートが問いかけてくる。

「そう、らしい……。」

「なら、お前も、オレたちと来いよ！」

しばらくの沈黙のあと、アスベルが口を開いた。この言葉には俺もヒューバートも驚いた。

ただ一人少女を除いて、だが。

「いいの、か？ 一緒に行っても？」

「ああ。構わないぜ！」

「兄さん！本当に大丈夫なの？お父さん、きつと怒るよ？」

「まあ、なんとかなるだろ。さ、早く行こうぜ！」

そう言うのアスベルはさっさと歩き出した。残った俺たちも後に続いた。

「うわ！なんだコイツ！」

道中、魔物に出くわした。こんな奴、俺は見たことが無い。

「知らないのか？モンスターだよ。一回くらい見たことあるだろ？」俺は首を横に振る。

「この世界には、モンスターがいないところなんて無いと思っただのに違うのかな。」

「まあ、いいや！さっさと倒して街へ行こう！」

武器を持たない俺は街につくまで守ってもらうことになってしまった。

ムカつくけれど仕方が無い。

「到ちやくく！ ココが、オレとヒューバートの街だ！どうだ？すつげーだろ！」

さっきから、アスベルが一人ではしゃいでいる。

「ここが、ボクたちの家がある「ラント」だよ。ボクらのお父さんはラントで一番偉い人で、領主って呼ばれてるんだ。」

周りを見ると、風車が二つあって、人も多くて賑やかで平和な力ンジだ。

「どうだ？お前ら、街の様子を見て何か思い出したか？」

「よく、わからない・・・。」

「俺も、思い出すことは無いかな。」

「そうかあ、どうしようか・・・。」

「アスベルっ！！！」

振り向くと少女が1人、怒った顔でアスベルを睨んでいる。

「うげ・・・シエリアだ・・・。」

「シエリア？」

アスベルはとてつもなく嫌そうな顔だ。

「今からそっち行くからそこから動かないで！」

そう言っつてシエリアがこっちに走ってこようとした。

「ケホッ！ ケホケホッ・・・！」

数歩走つたところで苦しそうに咳き込み、その場で止まってしまった。

「シエリア！ 急に走るから・・・。」

心配そうに言いながらアスベルが駆け寄る。続いて俺やヒューバートが駆け寄る。

「はあ・・・はあ・・・あなた達、あそこへ行ったんでしょ？」

「あ、ああ、あそこって？」

「とぼけないで！！街の裏山にある一年中花が咲いてる場所よ！」

あそこって一年中花だらけなのか・・・

「行く時は私も一緒ってあれほど約束したのに・・・。」

「そんな事言っただって、お前、絶対途中で歩けなくなるだろ？そう
なったらどうせオレがおんぶするハメになるんだ。」

「それで言うんだよね、おんぶされるのはイヤー！って。」
ヒューバートが付け加える。

「そ、それはアスベルのおんぶが下手だから・・・ケホケホッ！」

「あーもうしょうがないなあ・・・ホラ。」

アスベルがシエリアに背を向けてしゃがむ。

「い、いいわよ！一人で歩ける！／＼／」

少し頬を赤らめながら拒否した。

「ところで兄さん、あの子は？」

「あの子？それにこの子も・・・。」

そっぴいなながらシエリアは俺を見る。記憶が消えている俺は当然、
何も答えることもできず、シエリアから目をそらした。

「あ、まだあんなところに・・・ヒューバート、つれてきてくれ。」

「うん・・・。」

少女はまだ街の入口に立っていた。

「お前、どうしてこっちに来ないんだ？」

「・・・動くなって聞こえた。」

「それは別に、動いてもいいんだぞ？」

我慢でいなくて自分で言ってみた。

「そうなの？」

「この子、誰？」

シエリアが少女に近づき、ジロジロと見つめる。

「花畑にいたからつれてきたんだ……ってそんなに睨むなよ。女
同士仲良くしてやってくれ。」

「ムー……ところでアスベル手に持つてるその花は？」

「え？あ、こ、これ？」

シエリアアスベルに近づく。

「わー……きれい、もしかしてこれ、私に？」

「あ、いやその……」

「そういうことにしておこうよ、シエリアの機嫌もなおるし。」
アスベルがオロオロしているとヒューバートがアスベルにささやい
た。

「あ、まあそんなところだ。」

花がアスベルの手からシエリアに渡される。

「わあ……クロソフィの花ね。こんな季節に咲いているなんてや
っぱりあのうわさは本当だったのね。……いいわ。この花に免じて
今回のことは許してあげる。」

アスベルもヒューバートもホツとした顔だ。

「それにしてもこの二人どうしよう……。」

「……それなら私のおじいちゃんに聞いてみるのがいいと思うわ。
この街の人のことなら大抵知ってるはずだから。」
「そうだなフレデリックに聞いてみよう。」

少年達の出会い（後書き）

あんまりセリフとか変わってなかったW
のんびり更新していきますー

俺らは誰？

「で……デケエー……」

「そうか？追うとの城に比べりゃかなり小さいらしいぜ？」

「……そりゃあ兄さん、お城と比べるのはどうかと思うよ……
ヒューバートが静かにツッコミを入れたのが聞こえた。

うしろにいるシエリアと少女の声が聞こえてくる。

「あなたって本当に記憶がないの？」

「うん。」

少女がシエリアに答える。

「名前も？」

「覚えてないよ？」

「そう……とても可哀想。」

シエリアが俯き気味にそういうと

「どづして？どづして記憶や名前がないと可哀想なの？」

少女が言葉をさえぎるように言う。

「どづ！ごめんなさい！嫌、だよね……同情されるなんて。

私も病気で……わかるからあなたの気持ち……」

「……？」

そう言うと二人の短い会話は終わった。
(シェリアって病気なんだ・・・そうかだからさつき走れなかったんだ。)

広い庭に入るとすぐ花壇の世話をしているおじいさんが見えた。
おじいさんがこっちに気づいた。

「お帰りなさいませアスベル様、ヒューバート様。」
「ただいまフレデリック！」

アスベルがその言葉にすぐ答える。
(なるほどこの人がフレデリックさんか)

「シェリア、姿が見えないと思ったら・・・」
「ごめんなさいおじいちゃん・・・」

「申し訳ございませんアスベル様、アスベル様にご迷惑をかけてはならないとあれ程・・・」
「迷惑なんかじゃないって！」

アスベルが慌てて答える。

「ところでこの子達に見覚えはない？」
フレデリックが俺とその横の少女を見る。
「このお二人ですか？・・・ふむ。残念ながら存じ上げませんが」
「おじいちゃんこの子達、記憶喪失なんですって。」

シェリアが今までのことを簡単に説明する。

「記憶喪失？それは困りましたね。私どもの方で街の者に聞いてみ

「まじょうか？」

「いや、オレ達が行くよ。みんな街に行ってみようぜ！」

「日が暮れる頃にはお戻りになってくださいませ」

「うん わかった」

アスベルが返事をするに皆自然と庭から出た。

屋敷を出てすぐアスベルが俺の方を見た。シエリアもヒューバーも少女もキョトンとしている。

もちろん俺もキョトンとした顔でアスベルを見ている。

(・・・なんだこの画・・・)

「な・・・何？」

5秒くらい経ってから俺の方からアスベルに問う。

「あーいや、 会ってからずっと思ってたんだけどさ？」

「なんであの場所に寝てたのかわかってことか？」

「いや、違う。それも聞きたいけれど覚えてないだろ？」

俺はうなづいた。

(むしろ俺が聞きたいんだよ・・・)

「じゃあ何のことなの？アスベル」

「えと・・・あのさ、こいつの目ってなんか不思議じゃない？」

「俺の・・・目？」

みんな今度は俺に注目したしかも目だ。流石に恥ずかしくなつて目をそらした。

「うん、それは僕も思っていたよ。」

「私は今気づいたわ」

「シエリア気づくの遅いね」

少女がシエリアに笑いかけた。

「あ、あのさ俺・・・（見たことないんですけどー！いや、覚えてないのか？）」

「あ！シエリア！お前、鏡持ってたなかったっけ？」

「今は持ってないわ、家に戻って取ってくるね」

そう言つとシエリアはさっさと自分の家に戻った。

「そんなに俺の目って変か？」

「なんだよ、お前自分の顔も分からないのか？」

「まあそうみたいだね、仕方ないよ兄さん。」

そんな少しの会話をしているうちにシエリアが家からでてきた。

「はい、コレで自分の顔見てみて？」

鏡を受け取り、自分の顔を映してみる。

「えっ・・・？」

記憶をなくしてから初めて見た自分の顔、その目は本当に不思議な色だった。

太陽の光を受け、キラキラと輝く鏡に映し出された
その両目は左目と右目で全く違う色をしていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0925/>

守る強さ

2010年10月8日13時48分発行